

詩

石内秀典
尾崎与里子
山本英子
選

特選

色のない景色

東近江市
叶葉湖

病室の窓

朝の道路

流れる

白 白 白 黒 白 赤 白

黒 白 黒 白 白 水色

白 白 赤 白 赤 白 黒

日勤の職員

満車の駐車場

並ぶ

白 白 赤 黒 白 黒 白

黒 黒 白 青 白 白 黒

黒 銀 白 白 赤 黒 白

私の血液

昨日の結果

考える

白は白血球

赤は赤血球

水色は血小板

黒はがん細胞

赤 白 白 黒 白 水色

白 黒 黒 白 黒 黒 白

黄色

突然アオジが目の前を遮る

つまらないことを数えるのは

もうやめなよ

医者たちが部屋をノックした

窓辺の椅子からベッドに戻る

リンパ球がはじまる

丸めた背骨に刺さる針

横目に見上げる空は眩しい

目を落とした鉄柵に

黄色

もういない

(評)

作者は病室の窓から道を走る車の色を静かに数えている。そこから自身の血液の状態を連想していくが、一瞬遮った黄色いアオジは作者の想いが映された幻の希望だろうか。淡々とした筆致の中に、作者の哀しみや不安や決意が鮮やかに描かれていて惹き込まれる。



特選

雨の日

東近江市

前川利孝

夜からの雨で

朝は庭の緑が一層濃くなった様だ

わたしは気分の落ち着く雨の日が好きだ

どこに出ても何をする事も出来なくなつて

自分の部屋にこもる

本棚からわたしを取つて読んでくれと

盛んに語りかけが聴こえる

思い立つて

雨の中傘をさして歩いてみる

雨音が傘につぶつぶとぶつかり長靴を濡らす

屋根に降った雨はトユを伝いながら水を吐く

路や川や山が洗い流され清潔になる様だ

水田に蛙が鳴き出した

みんなが喜んでいる声に聴こえる

遠い昔

ひどい雨が続き近くの天井川が氾濫した

堤防が決壊して濁水がムラを襲った

どんどん水かさが増えて来る脅威

我が家は少し高台の為床下浸水で済んだが

隣近所で床上まで被害の出た家も多かった

今でも雨が續くとこの時の幻影が頭をかすめる

対策をとられここ五〇年程は何も起きない

その時代

川は自然に流れ

雨を受け止めて川を形成していた

稚アユやフナが泳ぎ

川の脇にはどじょうやナマズが棲んでいた

氾濫はなくなり人工的になった川には

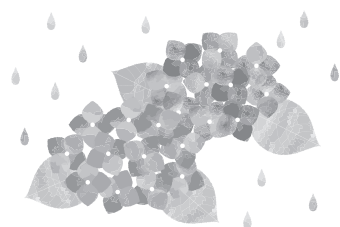
たまりにメダカが棲むだけとなつてしまつた

進歩と片づけるには寂しい気持ちが残る

わたしは黙つて雨の下を歩く

(評)

雨の日の様子を丁寧に辿る現在から、過去に出会つた災害の記憶、懐かしい魚たち、そして未来の危惧へと繋がっていく。どこまでも静かに語り続ける控えめな表現に、あらためて作者の考え深さが伝わってくるようだ。



入選

春の陽

正法寺町

高井

豊

空がボンヤリ青くなった

日の光が瞳を射る

まぶしい明るさに

思わず瞳をとじる

灰色の海に亡霊を浮ばせ

枯れた頬に

雪の涙をホロホロこぼした冬よ

しかばねのように

黙つた思い出よ

怠慢の中で

くずれた偶像よ

皆 さよならだ

胸を張つて背伸びをする

こうして

明るい光の渦の中に立っていると

私の中に舞い戻ってくるものがある

あたたかく湧き上がってくるものがある

すなおに振り返つて

「ありがとう」と言えそうだ

(評)

めぐって来た春の中に自身が存在していることを、抑制の効いた詩的な言葉で描いている。再生への喜びに感謝が伴うのは、長く生きてきた人だからこそその感懐だろう。

入選

古い

西今町

やまかみまさよ

このごろ ふいに呼び止められる
昼下がりの買い物の最中に
私の目の前を しらん顔して急ぎ足で
通り過ぎる客達の流れの中、おいと

慣じみの店だから

いつになく野菜達をじつとみていて
私に声かけしたのか 目くばせしてみたが
キューリも白菜も ツンとしてそしらぬ顔

買い物メモ書きを しまい忘れ

袋をゴソゴソ探していると

今度は肩を つつかれたような、おいに
大慌てして 袋を落とす



ちよつと低目の心地良い響きがして

物静かな音に 足が止まる

AI掃除機がさりげなく

私を上手に さけて通る

イラッシャイマセとささやきかけながら

いつか どこかで であつたあの子に似て

(評)

軽妙な語りかけの中に、すべての存在への慈愛の気持ちを感じられるのはなぜだろう？
生きるということ、老いるということを受容するその心映えが、さりげない書き方の中で活き活きと動いている。

佳作

走音に 魅せられ

古沢町
真野美栄子

佳作

なにが 好き

須越町
疋田浩二

佳作

笑顔の贈り物

愛知郡愛荘町
小野崎成人

《総評》

昨年九十二歳で亡くなった谷川俊太郎は、二十二歳の時に「二十億光年の孤独」で鮮烈なデビューをして以来、幅広い読者を長く魅了し続けてきました。八十八歳(米寿)で出した詩集「ベージュ」も、老いていく日常を、深い自然へ回帰していくひとりの人間として、分かりやすい言葉でさりげなく描かれています。円熟と新鮮さを同時に感じさせるのは、さすがです。

ナラティブという言葉があります。「物語」と解釈するのですが、ストーリーが物語の内容そのものを指すのに対して、ナラティブは語り手によって視点や解釈、意味づけの違いがあることを大切に、語り手と聴き手が呼応しあいます。医療や心理学でも取り入れられているようですが、詩作も、数人居れば数通りの、百人居れば百通りの感じ方や意味を持つています。そこにこそ詩の持つ本来の面白さが現れ、どこにも正解などを探す必要はありません。今回参加してくださった作品にも、それぞれの個性を豊かに感じるものが多かったように思います。これからも、読み手との呼応や共感を大切に、自分ならではの感性で書き続けてくださいますように。

尾崎 与里子

選者吟

風のはじまる

石内秀典

タンカーの船長だった彼は
穏やかに眼を閉じていた
一等航海士の白い制服が
畳まれて胸の上に置かれ
棺にはむせかえるほどの
花が手向けられ

キャプテンと刻印された名札が見えた

朝風は

陸軟風から海軟風に変わる境で
始まる

外洋からの

長い航海を終え

瀬戸内の母港にかえってきた彼

風ぎの始まる予兆を

襟立ててながめた

その表情のまま

静かに漂うだろう

時は明らかに止まり

周囲の人達は
一瞬のうちに彼を去って行く
他人の記憶は決して共有できない
我ら

異境の港での
幾多の記憶や
海水で満たされた
自分の身柄を
彼はどのように流れるのか

森の約束

尾崎 与里子

三方を山に囲まれて
ゆるやかに棚田が続いている
道沿いの小屋の前に干されている鹿の皮
移住してきたポーランド人の猟師が
数日前に獲った鹿だ
敬虔な方法で森の神に感謝を捧げ
丁寧処理された
鹿皮を革にするためには これから
いくつもの工程を経なくてはならない
皮についた血や肉を丁寧に取り去っていく
血や肉は異臭を放ちながら皮を腐食させ

もう一度

生きているものに戻ろうとするから

くり返し薬剤に漬け 水で洗い

力を入れて皮を擦り伸ばし

また薬剤に漬け 水に浸し 乾かし

我慢強く鞣すという工程を経なければ

人に添うものにはならない

留美子さんはさつきからずっと力を込めて

皮を擦り伸ばす作業を続けているが

風邪気味なのか少し咳をしている

友人からブレイメンのお土産にもらった

可愛い縞柄キャンディーを

留美子さんにお裾分けする

手で触れると 鹿の斑点は想像より大きく

毛は長くて硬い

今日も村の奥の谷底には鹿の遺骸が

積み上げられていく

冬の風が

山から吹き降ろして

斑の毛皮が静かにゆれている

あかあかと大きな

山本英子

鹿の大きな濡れた瞳に映る

自分自身に見つめられた時から

私は冷たい石の降る街を歩く

人はあるいは獣 けものは人の姿で

生きているのかもしれない

走る豹 立ちつくす冷羚 静かにふり返る狼

摘みきれないたんぽぽの野で

夕陽まみれのまま抱き上げられた

こぼれあふれ散るまばゆさの中

あかあかと大きな すがた かたち

いつか私も歩みゆくはるかの日

咆哮を噛み殺しながら

見知らぬ子をきつく抱きしめるのだろうか

女の子が見たこともない獣の姿で

